

中学生・高校生の社会的態度に関する研究(Ⅱ)

久世敏雄・速水敏彦¹⁾

I 問題

われわれは、中学生および高校生の社会的態度が、どのように発達し、変容するかを明らかにする目的で、保守的、革新的および大衆社会的態度の発達過程を検討してきた(久世・速水 1974)。そこでは、①中学生および高校生は、革新的態度得点が高く、保守的・大衆社会的態度得点は低い傾向のあること、また、②革新的、大衆社会的態度では学年ごとの変化はあまりないが、保守的態度では、中学生において高学年になるにしたがい保守的でなくなる傾向のあること等を報告した。

これらの結果を得る技法は、中学・高校生の社会的態度の平均、相関などを、横断的なデータに基づいて分析する手法であった。この横断的なデータに基づく統計的手法は、調査の研究ではしばしば用いられており、この手法で得られた結論が、どの程度、一般性を保ち得るかについての検討が、まず、必要であろう。

つぎに、社会的態度の研究では、上述した社会的態度の一般性についての検討が主としてなされ、個人内社会的態度の変容についての検討は、ほとんどなされていない現状である。中学生ごろの社会的態度が、高校生になっても、そのまま持続するものなのか、あるいは、高校生ごろのさまざまな経験によって、しだいに社会的態度の変容がなされるものなのか、これらの問いを検討することが必要である。中学生や高校生の個々人の社会的態度は、いつ頃から安定性を保ち得るかといった、個人内社会的態度の変容に焦点をあて、検討することも必要である。この検討をするためには、縦断的調査が要請されるのである。

ここでの目的は、以上の二点について検討することである。

II 方法

1. 社会的態度測定インベントリー

「中学生・高校生の社会的態度に関する研究(Ⅰ)」で作成した態度測定インベントリーを使用する。保守的、

革新的および大衆社会的態度は、それぞれ13項目の質問から構成されている。保守的態度の項目は、質問の(1)から2項目とびごとに、革新的態度の項目は、(2)から2項目とびごとに、大衆社会的態度の項目は、(3)から2項目とびごとに配列されており、それらは付表に示すとおりである。

なお、各態度測定のための13項目の合計点(合成得点)と各項目得点との相関係数を求めたところ(昭和49年の被調査者による)、それ自身の合成得点との相関が負になっている項目は、どの態度群にもみられない。また、中学生男子で革新的態度の合成得点と、136(29)*、125(32)(35)、中学生女子で、保守的態度の合成得点と、190(10)の相関がみられる項目のほかは、各態度の合成得点とそれぞれの項目の相関は、かなり高い。とくに、高校生においては、その傾向がある。

2. 対象および調査実施期日

被調査者は、名大附属中学・高校生であり、昭和49年2月中旬に実施した。これらの対象が横断分析のための被調査者であり、有効調査人員は、表1のとおりである。

表1 有効調査人員(昭和49年)

	中1	中2	中3	高I	高II	高III
男子	32	41	37	64	37	48
女子	37	33	35	50	36	45

また、すでに報告したように昭和48年1月中旬にも、同

表2 2回の調査を受けた有効調査人員

	1-2*	2-3	3-I	I-II	II-III
男子	34	32	26	25	44
女子	31	34	31	35	39

* 1-2は、昭和48年に中学1年、昭和49年に中学2年、I-IIは、昭和48年に高校1年、昭和49年に高校2年であることを示す。また、表8,9,10および11も同様である。

1) 大阪教育大学助手

* ()内数字は質問項目の番号である

様の調査を行っており、中学2年生から高校Ⅲ年生（高校1年の若干名を除く）までは、同じ調査をほぼ1年の間隔で2度受けたことになる。同じ調査を2度受けた対象が、縦断分析のための被調査者である。この有効調査人員は、表2のとおりである。

3. 結果の整理方法

保守的、革新的および大衆社会的態度のそれぞれ13項目の合計点を態度得点として個人別に算出する。得点化の方法は前回の報告のとおりである。結果の整理は、つぎの観点から行なった。

1) 横断的調査の分析

- (1) 中学・高校別、男女別による各社会的態度得点および各態度間の相関
- (2) 学年別、男女別による各社会的態度得点

2) 縦断的調査の分析

- (1) 2回の学年別、男女別による各社会的態度得点および各態度間の相関
- (2) 2回の学年別、男女別による各社会的態度の変動値および変動値の態度間の相関
- (3) 2回の学年別、男女別による各社会的態度の変動量
- (4) 2回の学年別、男女別による各社会的態度の変動型

Ⅲ 結 果

1. 横断的調査の分析

ここでは、昭和48年に実施した調査結果が昭和49年の調査結果と同様の傾向が得られるか否かの検討をする。

- (1) 中学・高校別、男女別各社会的態度得点および各態度間の相関

表3は、保守的、革新的および大衆社会的態度の平均（M）ならびに標準偏差（SD）を、表4、表5は、各社会的態度の相関を、中学・高校生別、男女別に示した

表3 社会的態度得点の平均および標準偏差

社会的態度	学 校 別 性 別 平均 標準偏差	中 学		高 校	
		男	女	男	女
保 守 的	M	3457	3536	3433	3227
	S D	560	477	739	613
革 新 的	M	4795	4679	4740	4797
	S D	409	463	644	524
大衆社会的	M	3291	3266	3497	3363
	S D	611	520	647	549

ものである。

表3から、中学生および高校生は、全体的にみて、男子、女子ともに革新的態度得点は高く、保守的、大衆社会的態度得点は、かなり低いことがわかる。

中学生と高校生を比較すると、男子は保守的、革新的態度ともに、ほぼ等しく、大衆社会的態度で、高校生は中学生にくらべ高い傾向がある（ $p < .05$ ）。女子は、中学生から高校生になるにしたがって、保守的でなくなる傾向があり（ $p < .001$ ）、革新的、大衆社会的態度は、ほぼ同様である。

男女別にみると、中学生では、各態度ともほぼ同様の傾向を示しているが、高校生女子は、高校生男子よりも保守的でない（ $p < .05$ ）傾向がある。

表4 社会的態度の相関（中学生）

	保 守 的	革 新 的	大衆社会的
保 守 的		-.824***	.298**
革 新 的	-.255**		-.050
大衆社会的	.436***	-.265**	

斜線の上段は女子、下段は男子。表5も同様である。表中*印は相関係数の有意性が $p < .05$ 、**印は $p < .01$ 、***印は $p < .001$ であることを示す。以下*、**、***印に関しては同様である。

表5 社会的態度の相関（高校生）

	保 守 的	革 新 的	大衆社会的
保 守 的		-.651***	.392***
革 新 的	-.600***		-.265**
大衆社会的	.342***	-.252**	

つぎに表4および表5から各社会的態度の相関をみると、保守的態度と革新的態度間に負の相関のあること（中学生男子 $p < .01$ 他はいずれも $p < .001$ ）、保守的態度と大衆社会的態度間に正の相関のあること（中学生女子 $p < .01$ 他はいずれも $p < .001$ ）および革新的態度と大衆社会的態度間に負の相関のあること（いずれも $p < .01$ ただし、中学生女子を除く）がわかる。

さらに、保守的態度と革新的態度間の負の相関は、中学生から高校生になるにしたがって、高くなる傾向がある（男女とも $p < .001$ ）。

- (2) 学年別、男女別各社会的態度得点

表6および表7は、各社会的態度の平均および標準偏差を学年別、男女別に示したものである。

表6 学年別各社会的態度得点の平均および標準偏差
(男子)

学 年 別 社会的態度 平均および標準偏差		中1	中2	中3	高I	高II	高III
保 守 的	M	3650	3588	3146	3362	3379	3569
	S D	465	457	606	659	773	792
革 新 的	M	4841	4705	4854	4802	4800	4610
	S D	354	370	472	494	700	747
大衆社会的	M	3472	3283	3143	3394	3527	3612
	S D	602	524	665	532	808	624

表7 学年別各社会的態度得点の平均および標準偏差
(女子)

学 年 別 社会的態度 平均および標準偏差		中1	中2	中3	高I	高II	高III
保 守 的	M	3513	3494	3197	3106	3361	3253
	S D	533	465	416	680	631	480
革 新 的	M	4695	4724	4620	4842	4756	4778
	S D	502	409	463	565	557	439
大衆社会的	M	3349	3148	3236	3232	3406	3473
	S D	473	506	559	469	563	590

表6および表7から、保守的態度については、中学生間では保守的態度を示さない方向で、得点の減少が若干みられるが、高校生間では顕著な変化はみられない。そして、男女ともに、中学2年と3年の間に差がみられている。(男子 $p<.001$ 女子 $p<.01$)

革新的態度については、各学年間の差は、男女とも殆どみられない。

また、大衆社会的態度については、男子の場合中学生

間で大衆社会的でない方向に若干減少し、高校生間で、大衆社会的方向へ若干増加する傾向がある。隣りあう学年間では、中学3年男子と高校1年男子の間に差がみられている($p<.05$)

男女差をみると、保守的態度において、男子が高校1年およびIII年で女子より保守的である($p<.05$)点を除いて、男女差はみられない。

表8 2回の学年別各社会的態度得点の平均および標準偏差(男子)

学 年 別 社会的態度 調査年度 平均および標準偏差		1 -- 2		2 -- 3		3 -- I		I -- II		II -- III	
		4 8	4 9	4 8	4 9	4 8	4 9	4 8	4 9	4 8	4 9
保 守 的	M	37.03	35.97	33.34	32.13	32.69	33.92	31.88	33.96	34.50	35.07
	S D	3.94	4.68	5.03	6.16	5.72	6.75	7.85	8.40	7.06	6.89
革 新 的	M	47.32	47.03	48.31	48.59	49.27	48.00	49.60	47.04	47.89	46.48
	S D	3.58	3.59	4.22	4.34	4.10	4.51	8.46	7.59	5.89	5.78
大衆社会的	M	31.97	33.00	31.69	31.41	33.39 *	35.65	34.12	33.80	34.82	36.00
	S D	4.79	5.10	6.83	6.80	7.05	5.19	6.88	8.59	6.17	6.45

表9 2回の学年別各社会的態度得点の平均および標準偏差(女子)

学 年 別 社会的態度 調査年度 平均および標準偏差		1 -- 2		2 -- 3		3 -- I		I -- II		II -- III	
		4 8	4 9	4 8	4 9	4 8	4 9	4 8	4 9	4 8	4 9
保 守 的	M	36.81	35.23	34.59 **	32.00	31.26	30.19	32.14	33.29	32.56	32.46
	S D	5.73	4.51	4.23	4.22	4.70	6.73	5.08	6.10	4.65	4.86
革 新 的	M	46.81	46.94	45.97	46.18	49.55	48.39	49.11 *	47.51	47.59	47.87
	S D	3.18	3.96	3.92	4.70	5.51	6.20	5.62	5.64	4.04	4.66
大衆社会的	M	33.48 *	31.68	33.15	32.74	31.07	32.19	33.03	33.83	34.08	34.28
	S D	5.99	5.12	4.54	5.63	6.00	5.06	4.90	5.54	6.21	6.07

2. 縦断的調査の分析

ここでは、昭和48年、49年ともに対象となった生徒について、約1年後の社会的態度の変容に焦点を合わせて分析する。

(1) 2回の学年別、男女別各社会的態度得点および各態度間の相関

表8および表9は、縦断的調査の分析の可能な対象について、2回の各社会的態度の平均ならびに標準偏差を学年別、男女別に示したものであり、表10および表11は、2回の各社会的態度間の相関を学年別、男女別に示したものである。

表8および表9から、中学・高校生の各社会的態度の平均は、1年の間隔において、男女ともに殆ど変動していないことがわかる。保守的態度では、女子において、中2-3で保守的でない方向に差がみられ($p < .01$)、革新的態度では、同じく女子において、高1-Ⅱで革新的でない方向に差がみられている($p < .05$)。また、大衆社会的態度では、男子の場合、中3-高1で大衆社会的な方向に($p < .05$)、女子の場合、中1-2で大衆社会的でない方向に差がみられる程度であり($p < .05$)、全般的には変動の少ないことがわかる。

表10 各社会的態度の2回の相関(男子)

	1-2	2-3	3-Ⅰ	Ⅰ-Ⅱ	Ⅱ-Ⅲ
保守的	.416*	.617***	.573***	.388	.649***
革新的	.433*	.584***	.718***	.423*	.351*
大衆社会的	.513**	.554***	.725***	.673***	.468**

表11 各社会的態度の2回の相関(女子)

	1-2	2-3	3-Ⅰ	Ⅰ-Ⅱ	Ⅱ-Ⅲ
保守的	.409*	.445**	.632***	.634***	.814***
革新的	.274	.441**	.799***	.802***	.668***
大衆社会的	.642***	.727***	.662***	.772***	.736***

表10および表11から、1年後の各社会的態度の相関は、中1-2女子の革新的態度および高1-Ⅱ男子の保守的態度の相関を除いて、いずれも正の有意な相関がみられている。

保守的態度については、男子の場合、高1-Ⅱを除いて有意な相関が示されており、女子では、中学から高校に進むにしたがって、相関係数の高くなる傾向がある。

革新的態度については、男子の場合、いずれも有意な相関が示されているが、高Ⅱ-Ⅲでは、中3-高1等にくら

べ、やや相関が低い。女子では、中1-2を除いて有意な相関がみられ、とくに高校では相関係数の高いことがわかる。

大衆社会的態度については、男子女子ともに、いずれも有意な相関が示されているが、女子では、各学年とも、.6以上の高い相関が示されている。

男女差についてみると、高1-Ⅱおよび高Ⅱ-Ⅲにおいて、女子は男子よりも相関の高い傾向がある。

(2) 2回の学年別、男女別各社会的態度の変動値ならびに変動値の態度間の相関

表12および表13は、各社会的態度について、今回(昭和49年)の態度得点から前回(昭和48年)の態度得点を減じた変動値を算出し、その平均と標準偏差を学年別、男女別に示したものであり、表14および表15は、変動値の態度間の相関を、学年別、男女別に示したものである。

表12 学年別各社会的態度の変動値の平均および標準偏差(男子)

学年別 社会的態度		1-2	2-3	3-Ⅰ	Ⅰ-Ⅱ	Ⅱ-Ⅲ
保守的	M	-1.06	-1.22	1.23	2.08	0.57
	S D	4.70	5.00	5.84	9.00	5.84
革新的	M	-0.29	0.28	-1.27	-2.56	-1.41
	S D	3.82	3.91	3.25	8.65	6.65
大衆社会的	M	1.03	-0.28	2.27	-0.32	1.18
	S D	4.88	6.43	4.86	6.45	6.51

表13 学年別各社会的態度の変動値の平均および標準偏差(女子)

学年別 社会的態度		1-2	2-3	3-Ⅰ	Ⅰ-Ⅱ	Ⅱ-Ⅲ
保守的	M	-1.58	-2.59	-1.07	1.14	-0.10
	S D	5.66	4.45	5.24	4.87	2.91
革新的	M	0.13	0.21	-1.16	-1.60	0.28
	S D	4.35	4.61	3.77	3.54	3.59
大衆社会的	M	-1.81	-0.41	1.13	0.80	0.21
	S D	4.77	3.89	4.63	3.58	4.46

表12および表13から、保守的、革新的および大衆社会的態度ともに、全般的にみて、変動値の小さいことがわかる。

つぎに、これを各社会的態度についてみていくと保守的態度では、男子の場合、中学では保守的でない方向に、高校では保守的な方向に僅かではあるが変化している。

また、中2-3と中3-高1の変動値間で差がみられている($P < .001$)。女子では、高1-Ⅱが保守的な方向に僅かに変化しているが、中学では、保守的でない方向に変化していることがわかる。

革新的態度については、男子、女子とも、中学では殆ど変化しておらず、高校では革新的でない方向に若干の変化がみられている。

大衆社会的態度については、男子の場合、全般的にみて、大衆社会的な方向への変動がみられるが、女子でも、高校において、同じ方向への変動がみられている。

表14 変動値の社会的態度間の相関(男子)

	1-2	2-3	3-Ⅰ	Ⅰ-Ⅱ	Ⅱ-Ⅲ
保守的 と 革新的	-.474**	-.214	-.351	-.786***	-.331*
革新的と大衆社会的	-.020	-.346*	-.353	-.476*	-.391**
大衆社会的と保守的	.335	.204	.304	.671***	.435**

表15 変動値の社会的態度間の相関(女子)

	1-2	2-3	3-Ⅰ	Ⅰ-Ⅱ	Ⅱ-Ⅲ
保守的 と 革新的	-.485**	.098	-.511**	-.497**	-.187
革新的と大衆社会的	.095	.302	-.221	.097	.051
大衆社会的と保守的	-.479**	.421*	.742***	-.251	.118

表14および表15から、変動値の態度間の相関をみると、全般的にみて、有意な相関は多いとはいえないが、男子では、高校生で、女子では、中学生で有意な相関がかなりある。

保守的態度と革新的態度間においては、中2-3女子を除いて男女ともに負の相関がみられ、有意な相関もかなりある。

革新的態度と大衆社会的態度間においては、男子の場合、高1-Ⅱ、高1-Ⅲで負の有意な相関がみられるが、ほかの学年では、男女とも相関は低い傾向がある。

大衆社会的態度と保守的態度においては、男子では、高1-Ⅱ、高1-Ⅲで正の有意な相関があるのに対して、女子では、中1-2で負の有意な相関、中2-3、中3-高1で正の有意な相関がある。

(3) 学年別、男女別各社会的態度の変動量

表16および表17は、変動の方向は捨象した変動量の分布(人数)と平均および標準偏差を、学年別、男女別に示したものである。

表16 学年別各社会的態度の変動量の分布と平均および標準偏差(男子)

社会的態度	学年別 変動量	1-2	2-3	3-Ⅰ	Ⅰ-Ⅱ	Ⅱ-Ⅲ
保 守 的	0~5	22	26	18	15	30
	6~10	12	4	7	5	9
	11~15	0	2	0	2	5
	16~20	0	0	1	1	0
	21~25	0	0	0	2	0
	M	3.74	3.78	4.00	6.36	4.21
	S D	2.93	3.49	3.98	6.70	4.10
革 新 的	0~5	30	28	23	16	29
	6~10	3	3	3	5	11
	11~15	1	1	0	1	1
	16~20	0	0	0	1	2
	21~25	0	0	0	2	1
	M	3.06	2.97	2.89	5.76	4.77
	S D	2.30	2.56	1.87	6.80	4.84
大 衆 社 会 的	0~5	26	18	18	14	30
	6~10	7	10	7	8	8
	11~15	1	4	1	3	5
	16~20	0	0	0	0	1
	21~25	0	0	0	0	0
	M	4.15	5.09	4.35	5.36	5.09
	S D	2.78	3.94	3.14	3.59	4.23

表17 学年別各社会的態度の変動量の分布と平均および標準偏差(女子)

社会的態度	学年別 変動量	1-2	2-3	3-Ⅰ	Ⅰ-Ⅱ	Ⅱ-Ⅲ
保 守 的	0~5	23	25	22	31	36
	6~10	6	8	8	3	3
	11~15	1	1	0	0	0
	16~20	1	0	1	0	0
	21~25	0	0	0	1	0
	M	4.42	3.65	3.90	2.94	2.21
	S D	3.88	3.64	3.65	3.88	1.90
革 新 的	0~5	26	29	36	30	36
	6~10	4	4	5	4	2
	11~15	1	0	0	1	1
	16~20	0	1	0	0	0
	21~25	0	0	0	0	0
	M	3.16	3.32	3.16	2.63	2.69
	S D	2.99	3.20	2.36	2.86	2.39
大 衆 社 会 的	0~5	21	28	26	30	32
	6~10	8	6	4	5	6
	11~15	2	0	0	0	1
	16~20	0	0	1	0	0
	21~25	0	0	0	0	0
	M	4.00	3.29	3.32	2.74	3.46
	S D	3.41	2.11	3.41	2.43	2.72

表16および表17から、保守的、革新的および大衆社会的態度とも、その変動量の0~5の者が半数以上を占め、変動量の小さい者の多いことがわかる。このことは、男子、女子ともにあてはまる。

つぎに保守的態度の変動量をみると、男子の場合、高I-Iの変動量が最も大きい。これに対して女子では、逆に高I-II、高II-IIIで、変動量の小さいことがわかる。

革新的態度の変動量は、男子の場合、高校生が中学生にくらべて大きい。これに対して、女子では、全般的に変動量の小さいことがわかる。

大衆社会的態度の変動量は、男子の場合、全般的にやや大きく、女子では、全般的にやや小さい。

男女差についてみると、保守的、革新的および大衆社会的態度ともに、高I-II、高II-IIIで、男子が女子よりも変動量の大きい傾向がある。

(4) 学年別、男女別各社会的態度の変動型

最後に、変動値や変動量が、各社会的態度のどの水準で生ずるかを検討するため、昭和48年の男女別の各態度得点を基準にして、その態度得点の高い群をH群、中程度の群をM群、低い群をL群として、各態度それぞれ30%、40%、30%の者が配分されるようにした。表18は、

表18 各型の得点基準

社会的態度		群別		
		H	M	L
保守的	男	38 以上	30~37	29 以下
	女	37 "	30~36	29 "
革新的	男	53 "	46~52	45 "
	女	52 "	46~51	45 "
大衆社会的	男	38 "	30~37	29 "
	女	37 "	30~36	29 "

各社会的態度の得点基準を示したものであり、表19および表20は、各社会的態度について、各学年ごとに、その変動型の割合を百分率で示したものである。

表19および表20から、1年後における態度水準の変動をみると、各社会的態度ともに、安定型——H-H群、M-M群およびL-L群——が、ほぼ50%を占めていることがわかる。

そして、各態度ともに、中学男子ではほぼ30%以上の者が、M-M群安定型であり、女子では、中学、高校とも、M-M群安定型が、他のH-H群およびL-L群安定型にくらべ多いことがわかる。

また、急激に上昇するL-H群や急激に下降するH-L群は、各社会的態度で、男女とも殆どみられない。

表19 学年別各社会的態度の変動型の百分率

(男子)

社会的態度		学年別	1-2	2-3	3-4	4-5	5-6
保守的	安定	H-H	26.5	18.8	15.4	4.0	22.7
		M-M	35.3	31.3	30.8	20.0	20.5
		L-L	0.0	12.5	11.5	24.0	15.9
		計	61.8	62.6	57.7	48.0	59.1
	上昇	L-H	0.0	0.0	3.9	8.0	2.3
		M-H	11.8	3.1	7.7	12.0	6.8
		L-M	2.9	9.4	19.2	12.0	11.4
		計	14.7	12.5	30.8	32.0	20.5
	下降	H-L	0.0	3.1	0.0	0.0	4.6
		H-M	14.7	6.3	3.9	8.0	13.6
		M-L	8.8	15.6	7.7	12.0	2.3
		計	23.5	25.0	11.6	20.0	20.5
革新的	安定	H-H	5.9	0.0	11.5	24.0	6.8
		M-M	32.4	31.3	38.5	20.0	22.7
		L-L	11.8	12.5	7.7	20.0	18.2
		計	50.1	43.8	57.7	64.0	47.7
	上昇	L-H	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
		M-H	0.0	21.9	3.9	4.0	13.6
		L-M	20.6	15.6	3.9	0.0	9.1
		計	20.6	37.5	7.8	4.0	22.7
	下降	H-L	0.0	0.0	0.0	8.0	6.8
		H-M	2.9	12.5	11.5	12.0	4.6
		M-L	26.5	6.3	23.1	12.0	18.2
		計	29.4	18.8	34.6	32.0	29.6
大衆社会的	安定	H-H	5.9	12.5	11.5	24.0	20.5
		M-M	35.3	28.1	42.3	20.0	22.7
		L-L	8.8	21.9	3.9	16.0	4.6
		計	50.0	62.5	57.7	60.0	47.8
	上昇	L-H	8.8	0.0	0.0	0.0	6.8
		M-H	5.9	3.1	15.4	8.0	15.9
		L-M	17.7	12.5	19.2	12.0	11.4
		計	32.4	15.6	34.6	20.0	34.1
	下降	H-L	0.0	0.0	0.0	4.0	0.0
		H-M	5.9	9.4	3.9	4.0	9.1
		M-L	11.8	12.5	3.9	12.0	9.1
		計	17.7	21.9	7.8	20.0	18.2

表20 学年別各社会的態度の変動型の百分率
(女子)

社会的態度		学年別	1-2	2-3	3-4	4-5	5-6
保守的 態度	安定	H-H	82.3	11.8	3.2	17.1	20.5
		M-M	19.4	23.5	32.3	34.3	38.5
		L-L	6.5	8.8	25.8	17.1	23.1
		計	58.2	44.1	61.3	68.5	82.1
	上昇	L-H	3.2	0.0	0.0	2.9	0.0
		M-H	9.7	5.9	3.2	8.6	2.6
		L-M	3.2	5.9	12.9	11.4	5.1
		計	16.1	11.8	16.1	22.9	7.7
	下降	H-L	0.0	2.9	0.0	0.0	0.0
		H-M	22.6	23.5	9.7	0.0	5.1
		M-L	3.2	17.7	12.9	8.6	5.1
		計	25.8	44.1	22.6	8.6	10.2
革新的 態度	安定	H-H	3.2	2.9	29.0	17.1	15.4
		M-M	35.5	38.2	19.4	28.6	25.6
		L-L	19.4	23.5	19.4	22.9	18.0
		計	58.1	64.6	67.8	68.6	59.0
	上昇	L-H	3.2	0.0	0.0	0.0	0.0
		M-H	6.5	8.8	6.5	5.7	7.7
		L-M	12.9	14.7	3.2	2.9	20.5
		計	22.6	23.5	9.7	8.6	28.2
	下降	H-L	0.0	2.9	0.0	0.0	0.0
		H-M	3.2	0.0	12.9	11.4	2.6
		M-L	16.1	8.8	9.7	11.4	10.3
		計	19.3	11.7	22.6	22.8	12.9
大衆社会的 態度	安定	H-H	9.7	5.9	16.1	20.0	25.6
		M-M	29.0	29.4	29.0	45.7	35.9
		L-L	16.1	11.8	25.8	11.4	12.8
		計	54.8	47.1	70.9	77.1	74.3
	上昇	L-H	0.0	2.9	0.0	0.0	5.1
		M-H	9.7	17.7	6.5	14.3	7.7
		L-M	6.5	2.9	16.1	0.0	2.6
		計	16.2	23.5	22.6	14.3	15.4
	下降	H-L	6.5	0.0	0.0	0.0	0.0
		H-M	16.1	11.8	0.0	5.7	7.7
		M-L	6.5	17.7	6.5	2.9	2.6
		計	29.1	29.5	6.5	8.6	10.3

つぎに保守的態度については、全般的に安定型の多いことはいうまでもないが、男子の場合、高校生において上昇するL-M群、M-H群の多いことがわかり、女子では、中学生において、下降するH-M群の多いのが目立っている。

革新的態度については、保守的態度と同様に安定型が多く、また、中3-高1、高1-Ⅱでは男女ともに上昇型(M-H群およびL-M群)が少なく、下降型の多いことがわかる。

大衆社会的態度についても、他の社会的態度と同様に安定型が多い。

Ⅳ 討 論

横断的調査の分析から

1) 中学生および高校生は、革新的態度得点が高く、保守的、大衆社会的態度得点は、ともに低い傾向がある(表3)。

2) 革新的、大衆社会的態度に関しては、学年ごとの変化はあまりみられないが、保守的態度については中学生間で保守的でなくなる傾向がある(表6および表7)。

3) 各社会的態度間の関係は、保守的態度と革新的態度間に負の相関、保守的態度と大衆社会的態度間に正の相関、革新的態度と大衆社会的態度間には負の相関があり—ただし中学生女子を除く—、保守的態度と革新的態度間の負の相関は、中学から高校に進むにしたがって相関の高くなる傾向がある(表4および表5)。

といった結果を得ることができた。これらの結果は、昭和48年の調査において得られた結果とはほぼ同様の傾向を示している。昭和48年の調査と昭和49年の調査では、被調査者に若干の相異がある。昭和48年調査時の高校Ⅲ年生は、すでに卒業し、昭和49年の中学1年生および高校1年生若干名が、新たに被調査者となっている。そして、昭和48年調査時の中学1年生から高校Ⅲ年生までは、学年進行にともなって、ほぼ全員が被調査者となっている。

このように、昭和49年の調査では、中学1年生と高校1年生のほぼ $\frac{1}{3}$ が新しく被調査者となり、他の生徒は、同じ被調査者である。こうした対象による1年の間隔をおいた横断的調査では、中学生・高校生は、ほぼ同様の社会的態度を示すことがわかった。

もちろん、1年の間隔において全く異なった被調査者による横断的調査の結果において、同様の調査結果を得ることができるかの疑問はあるが、1年間隔の社会的態度に関する同一の調査では、調査結果にかなりの斉一性を期待することが可能であろう。社会的態度、とくに、保守的、革新的および大衆社会的態度の次元では、急激な社会状況の変化などがおこらない限り、中学生および

高校生の社会的態度は、徐々に変容していくことが期待されるからである。

つぎに、縦断的調査の分析から

1) 各社会的態度の平均は、1年の間隔をおいても、男女ともに、殆ど変動していない(表8および表9)。また、各社会的態度の2回の相関は、有意な正の相関が多く、全般的にみて、高校生女子は、高校生男子よりも相関の高い傾向がある(表10および表11)。

2) 各社会的態度の変動値は、概して、小さいことがわかる(表12および表13)。また、変動値の態度間の相関は、全般的に有意な相関が多いとはいえないが、男子では高校生、女子では中学生で有意な相関がかなりある(表14および表15)。

3) 各社会的態度の1年間隔の変動量をみると、各態度ともその変動量0~5の者が半数以上を占め、変動量の小さい者が男子、女子ともに多い。また、高校生男子は、高校生女子よりも変動量の大きい傾向がある(表16および表17)。

4) 各社会的態度の変動型に着目すると、各態度ともに安定型——H—H群、M—M群、およびL—L群——がほぼ50%をこえており、とくに、女子では、M—M群安定型の多いことがわかる。また、各社会的態度ともに、急激に変化する群——L—H群およびH—L群——は、男女とも、あまりみられない(表19および表20)。

この縦断的調査から、中学生および高校生の社会的態度は、保守的、革新的小および大衆社会的態度ともに、変動値および変動量から判断して、一般的に、変動の少ない者の多いことがわかる。このことは、1年間隔の社会的態度の相関関係をみると、正の有意な相関の得られていることから、ある程度推察することができる。

しかしながら、変動値の分散や変動量に着目すると、高校生男子の場合、保守的の態度や革新的小の態度において変動量のやや大きいのが目立つ。これに対して、高校生女子は、変動量の少ないのが目立っている。このことは、1年間隔の社会的態度の相関の高さをみたとき、高校生男子にくらべ、高校生女子の相関が高い傾向のあることと関連しよう。高校生男子の変動の方向を考慮にいれると、保守的の態度においては、保守的な方向に、革新的小の態度においては、革新的小でない方向への変動が若干みられるのである。

これらの結果を考慮すると、中学・高校生の社会的態度は、全般的にみて、中学生のころには革新的小な態度を獲得し、その態度を維持し、若干変容しながら、かなり安定した態度を持続するものということができよう。そして、高校生ごろになると、男子の中には、すでに獲得した態度を、何らかの社会的事象と遭遇することにより、

新しく変容し、構造化することにつとめる者も、若干いるように思われる。社会での不合理な事実と直面し、さらに革新的な方向に態度を強める者のいることも容易に想像しうるし、世間的な義理人情の世界に共鳴を示す者もいるであろう。高校生ごろに保守的になり、革新的小でない方向への変動のみられることは、論理的な思考のみではうまくいかない現実の世界を注視しはじめたことも関連するのであろう。

一方、女子においては、中学生ごろに獲得した態度をそのまま高校生時代も維持し、安定した態度を示すように思われる。高校生男子のように、態度変容を極端に示す者は殆ど見あらず、変動のはばは小さいものといえよう。

もちろん、高校生のころに態度を変容しなかったものが、大学時代あるいはそれに相応する年代にあらたに態度変容を示す可能性は当然考えられるところである。とくに、女子においては、いかに生きるかといった性役割行動と関連して、保守的、革新的小および大衆社会的態度に変容をきたす可能性は強いものといえよう。

V 今後の展開

われわれは、附属中学・高校生を対象に、保守的、革新的小および大衆社会的態度の発達過程を検討している。そして、1年の間隔をおいた2回の横断的調査の分析から、中学・高校生の社会的態度の発達について、若干の知見を得ることができた。この調査の被調査者は、同一の対象者が多いのであるが、横断的調査の分析は、ほぼ同様の結果を示していた。この意味で、われわれは、中学・高校生の社会的態度の横断研究の一般性を、ある程度確認することができた。

しかし、われわれの目的は、中学・高校生の個人内社会的態度の変容過程を分析することである。このため、ほぼ1年の間隔をおき2度実施した同一被調査者の縦断的調査が分析された。2回の各社会的態度の相関、2回の各社会的態度の変動値および変動量(絶対値)等の検討から、中学生および高校生女子は、社会的態度の変動の小さい者の多いことがわかった。また、高校生男子では、社会的態度の変動の大きい者も、若干みられたのである。この結果は、たまたま、中学・高校生の1年の間隔をおいた2回の社会的態度の変動の分析から見出しただけのものである。この結果の一般性について、われわれは、1週間後の社会的態度の変動——信頼性——を含めて、今後検討することが必要である。さらに中学・高校生の3年(回)にわたる社会的態度の変容過程の分析も必要となろう。

また、われわれは、中学・高校生の個人内社会的態度

の変容過程の分析をねらっているのであるが、この報告では、上述の分析のほか、個人の変動型について若干の検討を加えたのみである。この個人の変動型についての検討も、今後に残された課題である。

これらの検討を経た後、中学生および高校生の社会的態度の変容過程に関して、かなりの見通しを得ることが可能になろう。このために、われわれは、今後、さらに社会的態度の縦断的調査が必要となる。

あとがき

本調査と並行して、教育原論の田浦研究室による調査

「中学・高校生の価値意識の検討」もなされている。田浦教授らの調査は、本調査と密接に関連している。その内容については、他日、報告される予定である。

さいごに、調査にご協力くださった名大附属中学・高校の先生方および生徒に深く感謝いたします。

文 献

久世敏雄・速水敏彦 1974 中学生・高校生の社会的態度に関する研究(1) 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科), 21, 1-11。

A STUDY OF SOCIAL ATTITUDES OF THE ADOLESCENTS (II)

Toshio KUZE and Toshihiko HAYAMIZU

The present study aimed at the change processes of social attitudes of the adolescents by the longitudinal method. Each scale of the questionnaire which measured conservative, radical and mass-social attitude contained 13 items in its final form.

The subjects who were administered inventory twice at a year's interval were 161 boys and 170 girls in the faculty school of Nagoya University.

The major results obtained were as follows:

- (1) The mean scores of each attitude in high school boys and girls changed only slightly at a year's interval. (Tables 8, 9, 12, and 13)
- (2) The correlation between each attitude at a year's interval was substantial and significant, especially in senior high school girls. (Tables 10, 11)

付 表

この調査は社会や学校や家庭などに対するみなさんの考え方や態度について調べるものです。現代の中学生や高校生が一般的にどのような考え方をしているのかをみるのが目的ですから、思ったまま卒直に答えて下さい。

〔 中学・高校 〕 〔 男・女 〕 （あてはまる方を○で囲んで下さい）

____年 ____組 ____番

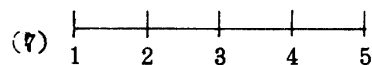
調 査 A

1 （やり方）

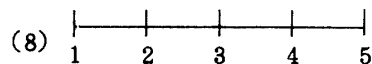
次の 39 のそれぞれの考え方や態度について、あなたが実際にどう考えているかを 1 非常に賛成 2 賛成 3 賛成とも反対ともいえない 4 反対 5 非常に反対のうちから 1 つ選んで○印をつけて下さい。

- | | 非
常
に
賛
成 | 賛
成 | な
い
と
も
い
え
な
い | 賛
成
反
対 | 反
対 | 非
常
に
反
対 |
|--------------------------------|-----------------------|--------|--------------------------------------|------------------|--------|-----------------------|
| (1) 国の政治は政治家にすっかりまかせた方がよい | (1) | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| (2) 個人の自由は尊重すべきである | (2) | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| (3) 流行語などはよく知っていないとはずかしい | (3) | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| (4) 女が政治などに口だしすべきでない | (4) | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| (5) 正しいことであれば世間体など気にすべきではない | (5) | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |
| (6) 労働者や大学生のストライキやデモ活動などは関心がない | (6) | 1 | 2 | 3 | 4 | 5 |

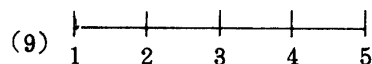
(7) 結婚は家柄を重んじなければならない



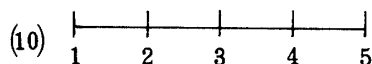
(8) いくら恩義のある人でも筋道のとらない頼みごとは断った方がよい



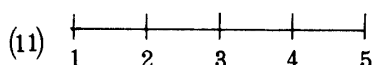
(9) みんなが見ているテレビ番組を見ていないと、とりのこされる気がする



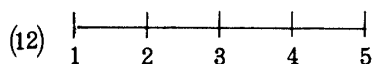
(10) 伝統や習慣は尊重すべきである



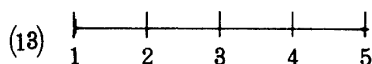
(11) 社会のために正しいことであるなら親の反対をおしきっても行動すべきである



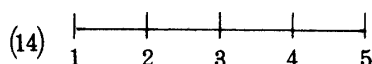
(12) 国の法律が望ましいものかどうか考える必要はない



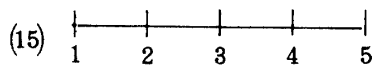
(13) 世間をわたるには義理や人情が最も大切である



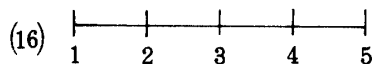
(14) いくら伝統だからといっても不合理なことはやめるべきである



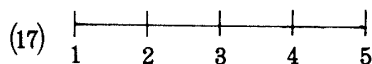
(15) 中・高校生の時代には政治の問題など考えるよりレジャーを楽しんだ方がよい



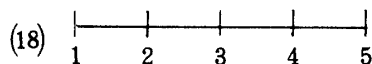
(16) 長男が家をつぐのは当然だ



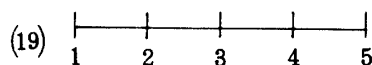
(17) デモやストをするのは労働者の当然の権利である



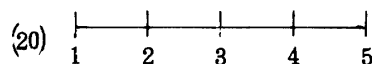
(18) 理論よりフィーリングやムードが大切である



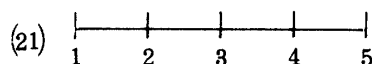
(19) 親孝行は子どもの義務である



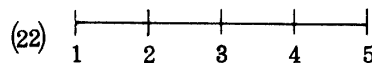
(20) 先輩の意見でも、まちがっていると思えば、納得できるまで議論する



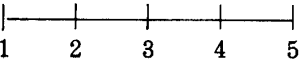
(21) 誰が衆議員の選挙で当選しようと日本の政治はかわらないと思う



(22) 目上の人にはもっと敬語を使った方がよい



中学生・高校生の社会的態度に関する研究(Ⅱ)

- | | |
|---|--|
| (23) 男女の交際は全く自由であり、まわりの人がとやかく言うべきでない | (23)  |
| (24) 今の世の中では平凡な家庭の中にささやかな幸福を求めた方がよい | (24)  |
| (25) 学校で定めている校則にはどんな場合にも従うべきである | (25)  |
| (26) 政治をよくするためには、もっと進歩的な人から多くの代議士を選出すべきである。 | (26)  |
| (27) 共同募金や歳末助け合い運動があるとなるべくさけるようにする | (27)  |
| (28) 世の中の秩序を守るために上下関係はなくてはならない | (28)  |
| (29) 家庭内の仕事は男女平等に分担すべきである | (29)  |
| (30) ベトナム戦争など日常生活とかけはなれた政治問題など考えるのはめんどろだ | (30)  |
| (31) 日本は天皇を中心にまとまるべきである | (31)  |
| (32) 「方角が悪い」などということはまったく信用しない | (32)  |
| (33) いつの世でもお金がなければ幸福にはなれない | (33)  |
| (34) デモやストでさわぐのは民主国家の恥である | (34)  |
| (35) 結婚式などの儀式はなるべく簡素化するのがよい | (35)  |
| (36) 皆と同じような持物や服装をしていないとひけめを感じずる | (36)  |
| (37) 家庭では父親がすべての実権をにぎるのが望ましい | (37)  |
| (38) 家庭では子どもの意見も大人の意見と同等に尊重されるべきである | (38)  |
| (39) 公害問題は被害者と加害者だけの問題である | (39)  |